

『中の根本の言葉を章とした知慧（根本中論）』

（第二十七章）

「過去時において現れた」「現れていない」というものと、
世間は恒常等という
見解であるそれらは、
前の果てに依拠したのである。 1

「過去時において現れた」というものと、
「現れていない」、世間は恒常等という
見解であるそれらは、
前の果てに依拠したのである。（仏）

「他の未来時において現れるだろう」と、
「現れない」、世間の果て等を
見解とするそれらは、
後の果てに依拠したのである。 2

「過去時において現れた」と
いうそれは不合理である。
諸々の前世に現れた、
まさしくそれは、これではない。 3

「その者自体が我となる」と思えば、
近取は別となる。
近取に結ばれていない、
君の我とは如何なるものか。 4

近取に結ばれていない、
我は有るのではないとした時、
近取そのものが我であるならば、
君の我は無である。 5

近取に結ばれていない、
我は有るのではないとした時、
近取そのものが我であるならば、
君の我そのものは無である。（第9章引用・正）

近取そのものは我ではない。
それは起こり、壊れるのである。
近く取られるものが如何様に、
近取者であるとなろうか。 6

我は、近取より
他であるとは、まさしく合理ではない。
もし他であるならば、近取無く
認識される筈であるが、認識されるものとして無い。 7

そのように、近取より他ではない。
それは近取そのものでもない。
我は、近取が無いのではない。
無そのものであるとも、それは確定しない。 8

「過去時において現れていない」というそれも不合理である。

諸々の前世に現れた、
それよりこれは、他ではない。 9

もし、これが他であるとなれば、
それが無くとも現れるとなる。
その如く、それは留まるとなり、
そこで死なずに生まれるとなる。 10

断滅や、業が無駄になることや、
他者が為した諸業を、
他者がそれぞれ経験することや、
それ等の背理となる。 11

現れていないものより現れたのではなく、
ここで過失として背理になる。
我が所作になることと、
現れるものか、無因を持つものになる。 12

そのように、我は現れた・我は現れていない、
その双方・双方ともではないと、
過去について見解するもの、
それらは合理ではない。 13

「未来の他の時点に現れるだろう」と、
「現れるとならない」という
見解であるそれらは、
過去時と等しいのである。 14

もし、その天がその人であるならば、
そう見るならば、恒常となる。
天はまさしく生まれていないとなる。
恒常に生まれることは無い故である。 15

もし、天より人が他であるならば、
そう見るならば、無常となる。
もし、天と人が他であるならば、
心相続は合理とはならない。 16

もし、一方は天であるが、
一方は人であるとなれば、
恒常と無常になるのである。
それも正理ではない。 17

もし、これが他であるとなれば、
それが無くとも現れるとなる。
その如く、留まるとなり、
そこで死なずに生まれるとなる。(仏)

現れていないものより現れたのではなく、
ここで過失として背理になる。
我が所作になることと、
現れるものが、無因を持つものになる。(仏)

そのように、我は現れた・我は現れていない、
その双方・双方ともではないと、
過去について見解するもの、
それは合理ではない。(顕)

もし、一方は天であるが、
一方は人であるとなれば、
恒常と無常になる故に、
それも正理ではない。(仏)

もし、恒常と無常の、
双方が成立したとなれば、
恒常でなく無常でなく、
成立したとなる主張を得る。 18

もし、何者かが何処かより何処かへ、
来て何処かへも行くとなれば、
それ故に、輪廻は始まりが無いと、
なるけれど、それは有るのではない。 19

もし、恒常が何も無ければ、
無常は何であるとなろうか。
恒常と無常と、
その二つが斥けられるとなった。 20

もし、世間に果てが有るならば、
彼方の世間とは如何様になろうか。
もし、世間に果てが無ければ、
彼方の世間とは如何様になろうか。 21

何故ならば、諸蘊のこの継続は、
灯明の光と等しい。
それ故に、まさしく果てが有ることと、
まさしく果てが無いことも正理ではない。 22

もし、以前が壊れるとなり、
この蘊に依拠して
その蘊が起こらなければ、
然れば世間は果てが有るとなる。 23

もし、以前が壊れず、
この蘊に依拠して
その蘊が起こらなければ、
然れば世間は果てが無いとなる。 24

もし、一方は果てが有るが、
一方は果てが無いとなれば、
世間は果てが有り、果てが無いとなる。
それも正理ではない。 25

如何様であれば、近取者の、
一方が様相として壊れるとなるが、
一方は様相として壊れるとならないのか。
そのようなそれは、正理ではない。 26

もし、恒常と無常の、
双方が成立したとなれば、
恒常でなく無常でなく、
成立するとなる主張を得る。(仏)

もし、何者かが何処かより来て、
何かが何処かへ行くとなれば、
それ故に、それに始まりは無いので、
恒常となったが、それも無い。(仏)

もし、恒常が何も無ければ、
無常は何であるとなろうか。
恒常と無常と、
その二つが斥けられるとなる。(顕)

もし、以前が壊れるとなり、
この蘊に依拠して
この蘊が起こらなければ、
然れば世間は果てが有るとなる。(仏)

もし、以前が壊れず、
この蘊に依拠して
この蘊が起こらなければ、
然れば世間は果てが無いとなる。(仏)

如何様であれば、近取者は、
一方が様相として壊れるとなるが、
一方は様相として壊れるとならないのか。
そのようなそれは、正理ではない。(26・仏)

如何様であれば、近取者は、
一方が様相として壊れるとなるが、
一方は様相として壊れないとなるのか。
そのようなそれは、正理ではない。(26・顕)

如何様であれば、近取は、
一方が様相として壊れるとなるが、
一方は様相として壊れるとならないのか。
そのようなそれも、正理ではない。 27

もし、果てが有ると果てが無いの、
双方が成立したとなれば、
果てが有るのではなく、果てが無いのでもなく、
成立するとなると主張することを得る。 28

あるいは、一切諸事物は
空である故に、恒常等であるとする見解は、
何が、何として、何に対して、
何より全く起こるとなろうか。 29

あるいは、一切諸事物は
空である故に、恒常等であるとする見解が、
何に、何に対して、何が、
何故に全く起こるとなろうか。(仏)

「見解を考察する」という第二十六章である。

その方が、大慈悲を御心に保たれ、
一切の見解を捨て去る為に、
聖なる法を示された。
かのゴウタマへ、礼拝奉る。

『中の根本の言葉を章とした智慧（根本中論）』という大乘の阿毘達磨の構成、勝義の真如を正しく示す、智慧（般若）波羅蜜の仕方を明らかにする、乱れぬ智恵と慈悲を具え、無上の如来乗の仕方を明らかにされ、※無上の如来乗の仕方をよく分類され、(仏) 歡喜地を成就し極樂浄土へと去られ、「純粹な光」という世間界において「智慧の根源の光」という如来となられるだろう偉大なる我性の阿闍梨、聖者龍樹による著述が完了した。

聖自在天の我性を持たれた吉祥ハツェンポ大王の勅語によって、インドの大僧院長である中観派ギャナガルバと、主校訳経官である比丘チョクロ・ルィギェルツェンが訳し、決定した。これに二十七章、四百四十九偈ある。巻は一巻半とした。

後に、無例というカシミールの都の中心、宝珠が隠された経堂の中で、カシミールの僧院長ハスマティと、チベットの訳経官であるニマ・ダクが、人の主、聖提婆の御代¹に『鬚句論』とすり合わせて改定した。

後にラサの変幻の経堂で、インドの僧院長カナカと、訳経官（ニマ・ダク）本人が、善く校合なされた。

¹ 聖提婆の御代：蔵語テキストのまま。

根本中論

※ (仏) は、『根本中論』 チョクロ訳 (『ブツダパーリタ』に引用された旧訳) で、パツァブ訳 (新訳) と異なる記述。

(頌) は、パツァブ訳 (新訳) ではあるが、『根本中論』本論と記述が異なる『頌句論』で引用された偈。

(正) は、『正理の海』で引用され、『根本中論』パツァブ訳と記述が異なるもの。

DECHEN 訳